

アジアの伝統芸能 第一回

なぜアジアの伝統芸能を  
学ぶのか

狂言「附子」を例に



外国の人から「日本独自の伝統文化にはどのようなものがありますか？」とたずねられたら、あなたは何と答えますか？

## Nôgaku theatre

Japan

Inscribed in 2008 (3.COM) on the Representative List of the

Intangible Cultural Heritage of Humanity (originally proclaimed in

2001)

Nôgaku theatre had its heyday in the fourteenth and fifteenth centuries, but actually originated in the thirteenth century when Sangaku was transferred from China to Japan. At the time, the term Sangaku referred to various types of performance featuring acrobats, song and dance as well as comic sketches. Its subsequent adaption to Japanese society led to its assimilation of other traditional art forms. Today, Nôgaku is the principal form of Japanese theatre and has influenced the puppet theatre as well as Kabuki. Often based on tales from traditional literature, Nôgaku theatre integrates masks, costumes and various props in a dance-based performance. Moreover, this theatre requires highly trained actors and musicians. Nôgaku encompasses two types of theatre: Noh and Kyôgen, which are performed in the same space. The stage projects into the audience and is linked by a walkway to a "hall of mirrors" backstage. In Noh, emotions are represented by stylised conventional gestures. The hero is often a supernatural being who takes on human form to narrate a story. The distinctive masks for which Noh is renowned are used for the roles of ghosts, women, children and old people. Kyôgen, on the other hand, relies less on the use of masks and is derived from the humorous plays of the Sangaku, as reflected in its comic dialogue. The text is written in ancient language and vividly describes the ordinary people of the twelfth to sixteenth centuries. In 1957 the Japanese Government designated Nôgaku as an Important Intangible Cultural Property, which affords a degree of legal protection to the tradition as well as its most accomplished practitioners. The National Noh Theatre was founded in 1983 and stages regular performances. It also organizes courses to train actors in the leading roles of the Nôgaku.



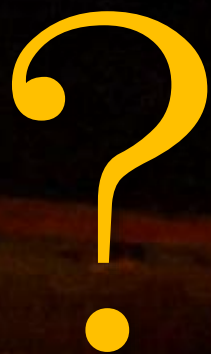
Nomination file

Decision

Inscription

Report

2008年、能楽(能・狂言)が文楽、歌舞伎とともに国連教育科学文化機関(ユネスコ)の無形文化遺産の代表リストに登録された。



能狂言の研究で、世界の拠点となっている研究  
所はどこにありますか？

# 野上記念法政大学能楽研究所

日本語

[English](#)

法政大学  
HOSEI UNIVERSITY

The Nogami Memorial

Noh Theatre Research Institute of

HOSEI University

[トップ](#)

[概要](#)

[研究所の活動](#)

[蔵書・文庫](#)

[デジタルアーカイブ](#)

[利用案内](#)

[刊行物](#)

[リンク](#)





あなたは能狂言を見たことが  
ありますか？

外国の人から「日本独自の伝統文化にはどのようなものがありますか？」とたずねられたら、あなたは  
何と答えるでしょうか。能・狂言、歌舞伎、文楽、講談、落語——名前  
はいろいろと浮かぶでしょうが、実際に鑑賞したことがあるものはどれ  
くらいあるでしょうか。さらに「その特色は？」と聞かれたら。

この授業では中国の伝統芸能について学ぶとともに、それとの比較を通じて、アジアという大きな視点から日本の伝統芸能の特色について考えていきます。

第一回の今日は狂言「附子」を例に、日本の伝統芸能とアジアとの意外な繋がりについて紹介します。

## 狂言

狂言は、今から約六〇〇年前、室町時代に成立した、せりふと仕草で演じられる演劇である。

わが国の古典芸能の中では、唯一の純粹な喜劇であり、二〇〇八年には、能とともにユネスコの無形文化遺産の代表リストに登録された。



狂言「附子」(『狂言絵』より)



# 狂言 「附子」

〔梗概〕

狂言の現行曲（現在も上演されている演目）には、和泉流が二五六曲、大蔵流が二〇〇曲、両者の重複を除き、計二六三曲がある。

その中でもっともよく知られているのが「附子」である。

# 狂言「附子」

〔梗概〕

主人が太郎冠者と次郎冠者を呼んで留守居を命じる。

主人は桶を取り出し、これは附子（トリカブトの根を乾燥させた毒薬）という猛毒で、風に当たっただけでも死んでしまうから、くれぐれも気をつけるようにと言い残し、屋敷を出る。



大蔵流狂言「附子」

(主：山本則俊、太郎冠者：山本則重、次郎冠者：山本則秀)

# 狂言「附子」

## 〔梗概〕

好奇心の強い太郎冠者は、附子とはどういうものか気になってしかたがない。怖がる次郎冠者を説得し、附子の毒に中らぬようと扇で扇ぎながら、こわごわ桶の中をのぞく。すると、中に入っていたものは。



大蔵流狂言「附子」(主人：山本則俊、太郎冠者：山本則重、次郎冠者：山本則秀)





大蔵流狂言「附子」

(主：山本則俊、太郎冠者：山本則重、次郎冠者：山本則秀)

## 狂言「附子」

〔梗概〕

桶の中に入っていたのは、意外にも砂糖だった。吝嗇な主人は、二人に砂糖をつまみ食いされぬよう嘘をついたのだ。

太郎冠者と次郎冠者は「こんなうまいもの食べたことがない」と砂糖を頬張る。

砂糖を食べる太郎冠者と次郎冠者



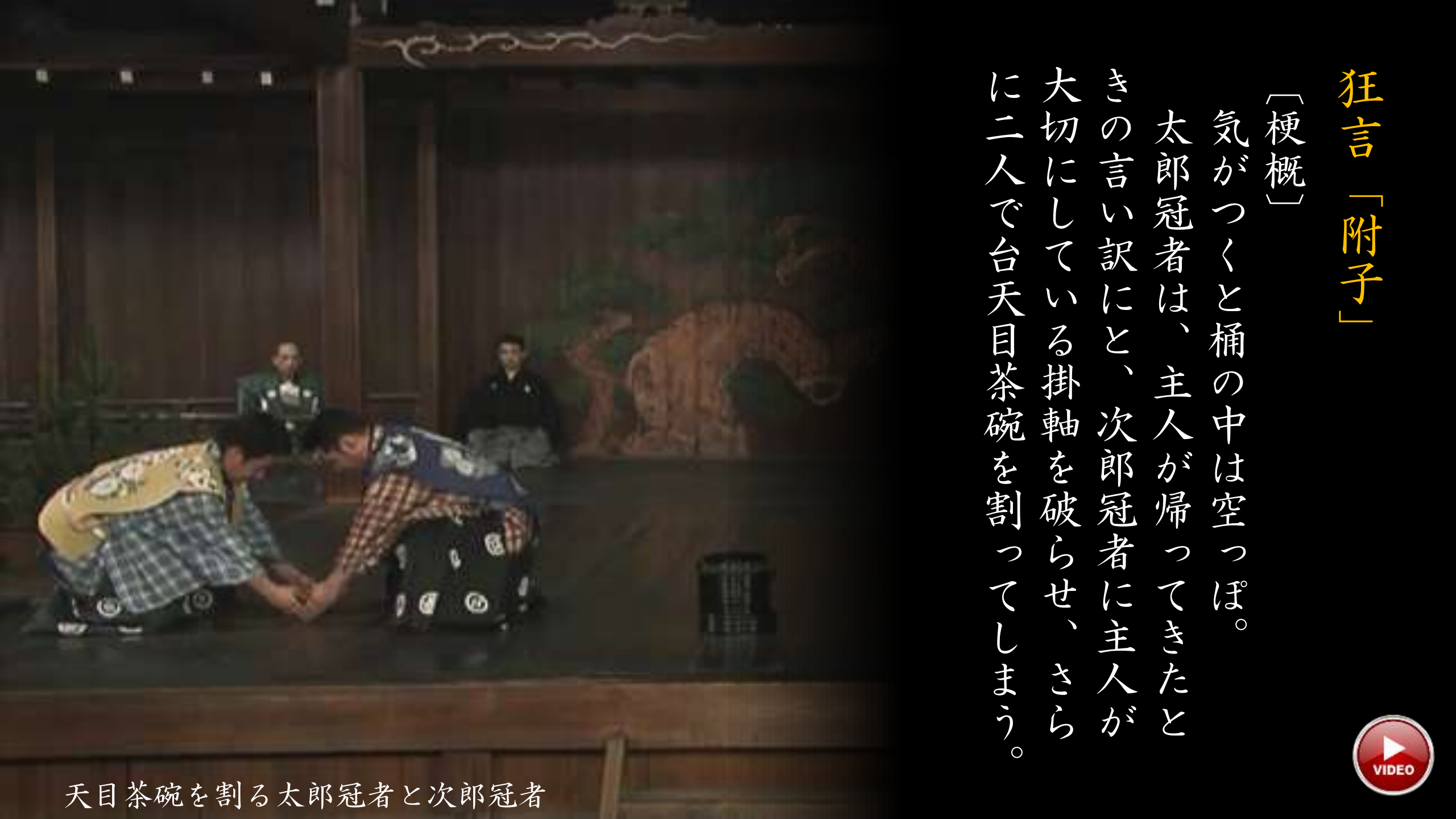


# 狂言 「附子」

〔梗概〕

気がつくくと桶の中は空っぽ。

太郎冠者は、主人が帰ってき  
たとき、次郎冠者に主人が  
大切にしている掛軸を破らせ、さら  
に二人で台天目茶碗を割ってしま  
う。



天目茶碗を割る太郎冠者と次郎冠者







大蔵流狂言「附子」

(主：山本則俊、太郎冠者：山本則重、次郎冠者：山本則秀)

# 狂言 「附子」

## 〔梗概〕

主人が外出からもどると、太郎冠者と次郎冠者が泣いている。何を泣いているのだとたずねると、二人は留守の間にうっかりして主人が大切にしている掛軸と台天目茶碗を割ってしまった。そこで死んでおわびをしようとして附子を食べた。ところが、なぜか死ねないので、泣いていたのだ、と言い訳する。

大声で泣く太郎冠者と次郎冠者





大蔵流狂言「附子」

(主：山本則俊、太郎冠者：山本則重、次郎冠者：山本則秀)

# 狂言「附子」の歴史

鎌倉時代	13世紀に僧・無住が編んだ説話集『沙石集』に当時の民間伝承として「附子」のモチーフが記録される
室町時代	14～15世紀に描かれた『法師物語絵巻』(僧侶の貪欲や吝嗇を風刺した絵巻物)の中に「附子」のモチーフが描かれる
安土桃山時代	16世紀に編まれた『天正狂言本』に寺の住持と小僧を主人公とした「ぶすきとう(附子砂糖)」が記録される
江戸時代	『祝本狂言集』に大名、太郎、次郎の主従狂言として「附子」が記録される 大蔵流、和泉流など諸流派の「附子」が成立

〔鎌倉時代〕無住『沙石集』

卷七下 慳貪者事

ある山寺に慳貪なる房主ありて、  
飴桶を一つもちて、只一人ある小児  
にいささかも食はせずして、  
「これは、人の食へば死ぬ物ぞ」  
とて、ただ一人食ひてはよく置きお  
きしける。

度ヲ行スレバ亦多ク物セズツキセス事ヲシラスコソ返々モラロカ  
ナレ是ヲアラツヒテ者卷モセズ子息弟子ノ中ノアリキモ財寶  
ノ故ナリ或山寺ニ有徳ノ房主弟子門徒多ク有ケリ頭死ノ  
處分モセカリケルマ、ニ弟子共處分論ノ中アリクシテ問答シ  
葬モセズ兩三日ニ及フホトニクサク成ケルヲ見カ子テヨソヨリ  
葬シテケリ彼葬シタル者カタリキムナニ近キ事也サレバ心アラ  
ム人ハ眞實ノ福田ノ藏ニ積蓄テ七分全得ノ慧業ヲ修スヘ

キナリ世ノ人ノカレコキト思ハ、カナシク、善事ニツキヤス事ヲ  
ハオニカマシキ事ト慳貪ノモノハ思アヒタリ實ニ後ノ世ノツカ  
キタクハヘシレラサレコソヨカマシク覺エシ能ク思ハカラスヘシ  
或山寺ニ慳貪ナル房主アリテ粘桶ヲ一モチテ只一人アル  
小兒ニイサ、カモクハセズ。是ハ人ノクハバ死ヌ物ツトテダ、一  
人クヒテハヨクヲキクシケルヲ此兒イカ、ノ是ヲクハマシト思テ  
房主他行ノヒマニタチニ高クツキタルトルホトニ、髮ニモ小袖  
ニモウチコホソツタタリケリ日比ホレト思ケルマ、ニ能クニ  
三盃クヒテ房主ノ秘藏ノ水瓶ヲ兩タリノ石ニ落ソウチワリテ  
房主ノ歸タル時シクト泣何事ツケレカラスノチキヤヤトイ  
ヘハアサマシキ事ノ候御水瓶ヲアヤチニウチワリテ候時ニイカ  
ナル御勘當モヤト思ヒ候テ命イキテモヨシナク覺ヘテ人ノクハ

〔鎌倉時代〕無住『沙石集』

卷七下 慳貪者事

この兎、いかがしてこれを食はま  
しと思ひて、房主他行の暇に棚に高  
く置きたるを取るほどに、髪にも小  
袖にもうちこぼしてつけたりけり。

日頃欲しほしと思ひけるままに、  
よく二、三杯食ひて、房主の秘蔵の  
水瓶を雨だりの石に落として打ち割  
り、房主の帰りたる時、しくしくと  
泣く。

ナレ是ラアラフヒテ者モセズ子息弟子ノ中ノアヒキモ財寶  
ノ故ナリ或山寺ニ有徳ノ房主弟子門徒多ク有ケリ頭死  
ノ慶分モセサリケルマ、二弟子共處分論ノ中アヒクシテ問答シ  
葬モセズ兩三日ニ及ブホトニクサク成ケルヲ見カ子テヨソヨリ  
葬シテケリ彼葬シタル者カタリキムナニ近キ事也サレバ心アラ  
ム人ハ眞實ノ福田ノ藏ニ積蓄テ七分全得ノ慧業ヲ修スヘ

キナリ世ノ人ノカレコキト思ハ、カナシク、善事ニツキヤス事ヲ  
ハオニカマシキ事ト慳貪ノモノハ思アヒタリ實ニ後ノ世ノツカ  
キタクハヘシレサカルコソチヨカマシク覺ユレ能ク思ハカラスヘレ  
或山寺ニ慳貪ナル房主アリテ拈桶ヲ一モキテ只一人アル  
小兒ニイサ、カモクハセズ。是ハ人ノクハ死ヌ物ツトテタ、一  
人クヒテハヨクヲキクシケルヲ此兒イカ、ノ是ヲクハマレト思テ  
房主他行ノヒマニタチニ高クツキタルヲトルホトニ、髮ニモ小袖  
ニモウチコボソツケタリケリ日比ホレト思ケルマ、二能ク二  
三盃クヒテ房主ノ秘蔵ノ水瓶ヲ雨タリノ石ニ落ソウチワリテ  
房主ノ歸タル時シククト泣何事ツケレカラスノチキヤウヤトイ  
ヘハアサマシキ事ノ候御水瓶ヲアヤチニウチワリテ候時ニイカ  
ナル御勘當モヤト思ヒ候テ命イキテモヨシナク覺ヘテ人ノツハ

（鎌倉時代）無住『沙石集』

卷七下 慳貪者事

「何事ぞ、けしからずの泣きやうや」と言へば、

「あさましき事の候。お水瓶をあやまちに打ち割りて候時に、いかなる御勘当もやと思ひ候て、命生きてもよしなく覚へて、人の食へば死ぬと仰られ候物を一盃食べ候へども死なれ候はず、二、三盃食べつれども死なれ候はず、髪にも小袖にもつけて死なんとし候へども死なれ候はず」と言ひける。

三盃クヒテ房主ノ秘藏ノ水瓶ヲ兩ツリノ石ニ落ソウチワリテ  
房主ノ歸タル時シククト泣向事ツケレカラスノチキヤヤトイ  
ヘハアサマシキ事ノ候御水瓶ヲアヤマチニウチワリテ候時ニイカ  
ナレ御勘當モヤト思ヒ候テ命イキテモヨシナク覺ヘテ人ノツヘ  
バ死ト仰ラレ候物ヲ一盃食べ候へドモ死ナレ候ハスツ二ツ  
タヘツレドモシナレ候ハスカミニモ小袖ニモツケテ死ナントモ候  
ヘ共スヘテ死レ候ハストイヒナレ慳貪ナルハ一サレ損也少シク  
ハセタラハ水瓶ハワラシレ見ノ心カ賢カリケル學問ノ譽聲  
モ無下ニハアラシ盗人ト智者ノ相ハ同レト云ヘリ舍利佛ハ  
ムカシ盗人也智慧ヲモテ盜ヲ能スル也  
沙石集卷第七下終 神護寺 迎接院  
乾元二曆外季春之候此書道證上人奉渡畢

于時乾元第二之曆外季春初之六日於洛陽之西  
山西方寺又重一部書寫之次此卷與一抄書改之  
畢 片山隱士道慧春秋五十四

（鎌倉時代）無住『沙石集』

卷七下 慳貪者事

慳貪なるはまさきに損なり。少し食はせたらば、水瓶は割られじかし。児の心賢かりけり。学問の器量も無下にはあらし。

或山寺ニ慳貪ナル房主アリテ拵桶ヲ一モキテ只一人ノ小兒ニイサカモクハセズ。是人ノ多ハ死ヌ物ツトテ女一人クヒテハヨクヲキクシケルヲ此兒イカメノ是ヲクハマレト思テ房主他行ノヒマニタナニ高クヲキタルトホドニ髮ニモ小袖ニモウチコホソツテタリケル日比ホレト思テルマニ能クニ三盃クヒテ房主ノ秘藏ノ水瓶ヲ兩タリノ石ニ落ソウチワリテ房主ノ歸タル時シクト泣向事ツケレカラスノキヤヤトイヘハアサマシキ事ノ候御水瓶ヲアヤマチニウチワリテ候時ニイカナル御勘當モヤト思ヒ候テ命イキテモヨシナク覺ヘテ人ノツヘ

ハ死ト仰ラレ候物ヲ一盃タヘ候ヘドモ死ナシ候ハスツニタタヘツレトモシナシ候ハスカミニモ小袖ニモツテ死ナントモ候ヘ共スヘテ死シ候ハストイヒケル慳貪ナルハ一サレ損也少シクハセタラハ水瓶ハワラシレ見ノ心カ賢カリケル學問ノ器量モ無下ニハアラシ盗人ト智者ノ相ハ同レト云ヘリ舍利佛ハムカシ盗人也智慧ヲモテ盗ヲ能スル也  
沙石集卷第七下終 神護寺 迎接院  
乾元二曆外季春之候此書道證上人奉渡畢

于時乾元第二之曆外季春初之六日於洛陽之西山西方寺又重一部書寫之次此卷與一抄書改之  
片山隱士道慧春秋五十四



# 狂言「附子」の歴史

鎌倉時代	13世紀に僧・無住が編んだ説話集『沙石集』に当時の民間伝承として「附子」のモチーフが記録される
室町時代	14～15世紀に描かれた『法師物語絵巻』(僧侶の貪欲や吝嗇を風刺した絵巻物)の中に「附子」のモチーフが描かれる
安土桃山時代	16世紀に編まれた『天正狂言本』に寺の住持と小僧を主人公とした「ぶすきとう(附子砂糖)」が記録される
江戸時代	『祝本狂言集』に大名、太郎、次郎の主従狂言として「附子」が記録される 大蔵流、和泉流など諸流派の「附子」が成立

# 『法師物語絵巻』

このモチーフは僧の貪欲や妄語を風刺する笑話として、絵巻物の題材にもなった。

近年公開された『法師物語絵巻』には、僧と小僧の対話を通じて、この笑話が生き生きと描かれている。



僧侶にまつわる笑話を集めた『法師物語絵巻』（個人蔵 14～15世紀）

悪れは香の粉にば死ぬる程に  
死食薬を入れ具ひて食うぞ



それは何をなり候うぞ  
これは何なり候ひ候へ

この鉢を過ちに打ち割りて候が、  
いかなるべき身や(ら)んと思ひて、  
生きて何にししべきとて、坊主の  
死ぬる御薬の御下ろしを多く取り  
食いて候へども死なれず候……

やれ、われは何事にさように  
泣くぞ 何事かありつるぞ

# 狂言「附子」の歴史

鎌倉時代	13世紀に僧・無住が編んだ説話集『沙石集』に当時の民間伝承として「附子」のモチーフが記録される
室町時代	14～15世紀に描かれた『法師物語絵巻』(僧侶の貪欲や吝嗇を風刺した絵巻物)の中に「附子」のモチーフが描かれる
安土桃山時代	16世紀に編まれた『天正狂言本』に寺の住持と小僧を主人公とした「ぶすきとう(附子砂糖)」が記録される
江戸時代	『祝本狂言集』に大名、太郎、次郎の主従狂言として「附子」が記録される 大蔵流、和泉流など諸流派の「附子」が成立

天正狂言本

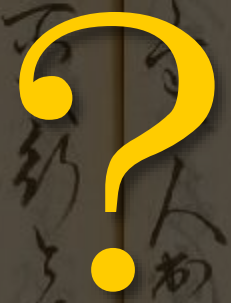
現存する最古の狂言台本。中世の狂言の姿を伝える唯一の台本でもある。

卷末に天正六(一五七八)年の日付があるため、この名で呼ばれる。安土桃山時代の狂言一〇三曲の上演方法が記録されている。

一 守一人 初て二人 守ひ 初て  
守ひ 初て 守一人 初て 守二人 初て

守一人 初て 守二人 初て 守三人 初て  
守四人 初て 守五人 初て 守六人 初て  
守七人 初て 守八人 初て 守九人 初て  
守十人 初て 守十一人 初て 守十二人 初て  
守十三人 初て 守十四人 初て 守十五人 初て  
守十六人 初て 守十七人 初て 守十八人 初て  
守十九人 初て 守二十人 初て 守二十一人 初て  
守二十二人 初て 守二十三人 初て 守二十四人 初て  
守二十五人 初て 守二十六人 初て 守二十七年 初て  
守二十八年 初て 守二十九年 初て 守三十年 初て  
守三十一人 初て 守三十二人 初て 守三十三人 初て  
守三十四人 初て 守三十五人 初て 守三十六人 初て  
守三十七人 初て 守三十八人 初て 守三十九人 初て  
守四十人 初て 守四十一人 初て 守四十二人 初て  
守四十三人 初て 守四十四人 初て 守四十五人 初て  
守四十六人 初て 守四十七人 初て 守四十八人 初て  
守四十九人 初て 守五十人 初て 守五十一人 初て  
守五十二人 初て 守五十三人 初て 守五十四人 初て  
守五十五人 初て 守五十六人 初て 守五十七人 初て  
守五十八人 初て 守五十九人 初て 守六十年 初て

Handwritten Japanese text in cursive style (sōsho) on two pages of an old book. The text is mostly illegible due to fading and bleed-through from the reverse side.



世界に一冊しか現存しない狂言本は、  
中世の狂言の姿を伝える天正狂言か  
どこに所蔵されているか

# 野上記念法政大学能楽研究所

日本語

[English](#)

法政大学  
HOSEI UNIVERSITY

The Nogami Memorial

Noh Theatre Research Institute of

HOSEI University

[トップ](#)

[概要](#)

[研究所の活動](#)

[蔵書・文庫](#)

[デジタルアーカイブ](#)

[利用案内](#)

[刊行物](#)

[リンク](#)





天正狂言本

ふすきたう

一はうす一人出て二人よび出す。  
「よ所へ行」とてるすにおく。  
「おくのまにぶすがある。あけて  
見てしするな」とゆふ。「もつ  
とも」とてゐる。

一はうす一人出て二人よび出す

よ所へ行

おくのまにぶすがある

あけて

見てしするな

とゆふ

もつ

とも

あふ入新とてほまにわく  
わかれりにあはるわのわゆて  
あて志あるなとあふんしと  
ここのわ二人のあふあしとて  
あふさたうとこまふとて  
あふん天目打あふまひての  
あふすあてこは紙あて  
あはわらせとふ一はうす  
あふあしとてす二はうすとも

天正狂言本

………二人の者 ふしんして  
見る。さたふをみなくう。さて  
急さん天目打かふす。なひてゐ  
る。はうす来て、これを見て  
たずぬる。せれふ「一口くへとも  
しなれもせず、二口くへともし

一 ちりす一人あて二人ふひぢぢ

あふしんしてふしんして  
ふしんしてふしんして

あふしんしてふしんして

あふしんしてふしんして

あふしんしてふしんして

あふしんしてふしんして

あふしんしてふしんして

あふしんしてふしんして

あふしんしてふしんして

あふしんしてふしんして

あふしんしてふしんして

天正狂言本「ふすさたう(附子砂糖)」 (野上記念法政大学能楽研究所蔵)

うき世とせむ三日月の如く六口  
十口計 移りくく」と云ふ  
世の如く三日月を言れし  
扇しとめ

八層

一人あて八層と答はるる清  
あ(糸)又一人あて八層清  
水(糸)こりり念とあつひま  
ちりたるといれりいあつと意  
ふう(糸)あつちうせうけお  
ふ人の言(糸)うき世にや

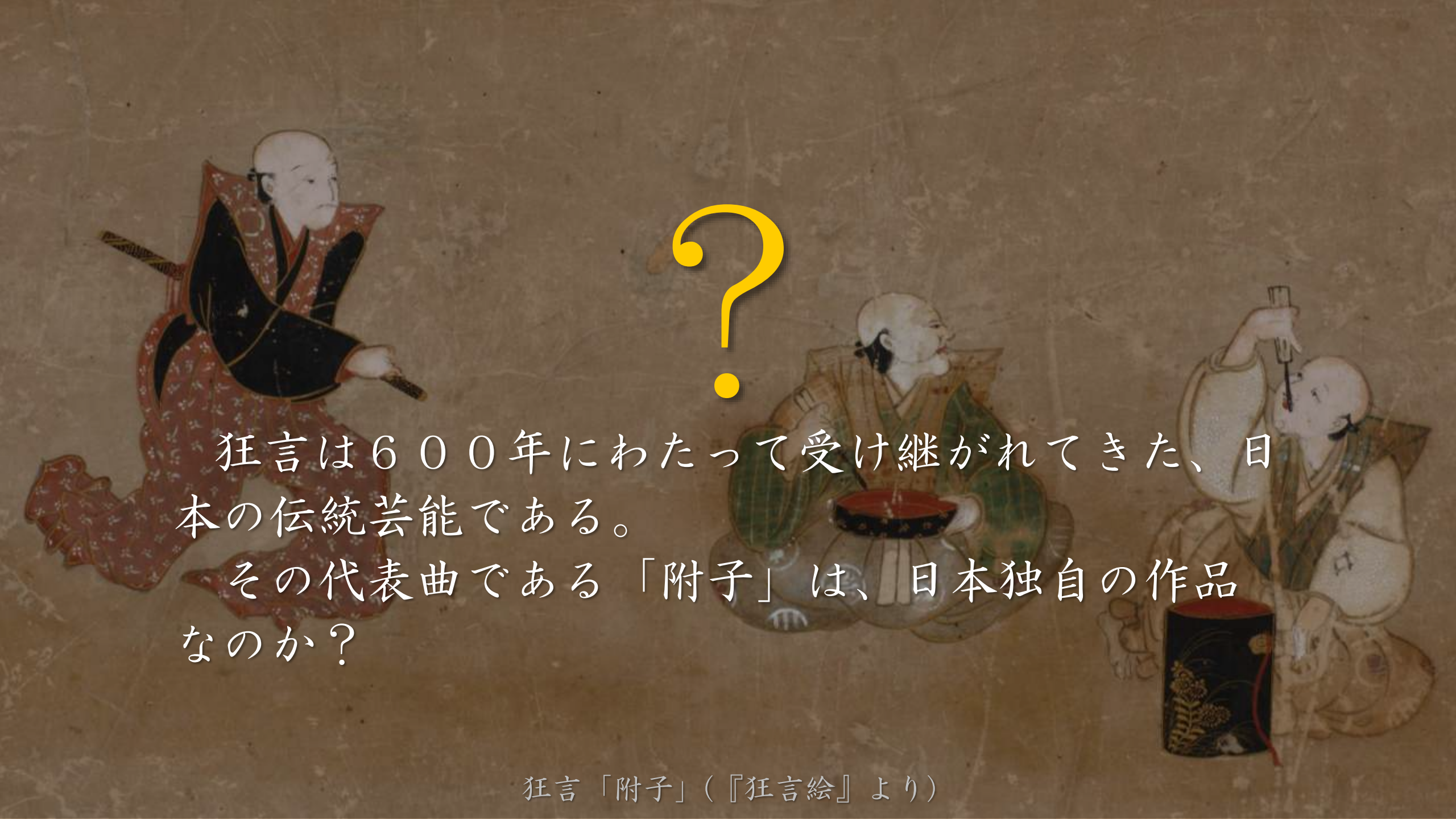
天正狂言本

なれもせず。三口四口五口六口  
十口とねぶりくへども 死な  
れぬ事こそ目出けれ」。ひ  
やうしとめ

天正狂言本「ぶすきたう(附子砂糖)」 (野上記念法政大学能楽研究所蔵)

# 狂言「附子」の歴史

鎌倉時代	13世紀に僧・無住が編んだ説話集『沙石集』に当時の民間伝承として「附子」のモチーフが記録される
室町時代	14～15世紀に描かれた『法師物語絵巻』(僧侶の貪欲や吝嗇を風刺した絵巻物)の中に「附子」のモチーフが描かれる
安土桃山時代	16世紀に編まれた『天正狂言本』に寺の住持と小僧を主人公とした「ぶすきとう(附子砂糖)」が記録される
江戸時代	『祝本狂言集』に大名、太郎、次郎の主従狂言として「附子」が記録される 大蔵流、和泉流など諸流派の「附子」が成立



狂言は600年にわたって受け継がれてきた、日本の伝統芸能である。

その代表曲である「附子」は、日本独自の作品なのか？

狂言「附子」（『狂言絵』より）

## 新たな資料の発見

十九世紀の末、シルクロードの仏教石窟（莫高窟第十七窟）で発見された古文書から、狂言「附子」の類話を収めた古写本が見つかった。

敦煌写本『啓顔録』である。

## 敦煌本啓顔録の発見

一九〇〇年、シルクロードのオアシス都市・敦煌の近郊の仏教石窟に暮らす王円籙という道士が、そこに小さな隠し部屋(莫高窟第一七窟)があるのを発見した。

十一世紀ごろ封印されたと考えられるこの隠し部屋には、四世紀から十一世紀までの文書数万点が保存されていた。

その中から、狂言「附子」とよく似た物語を持つ『啓顔録』という笑話集の唐代写本(七二三年)が見つかった。



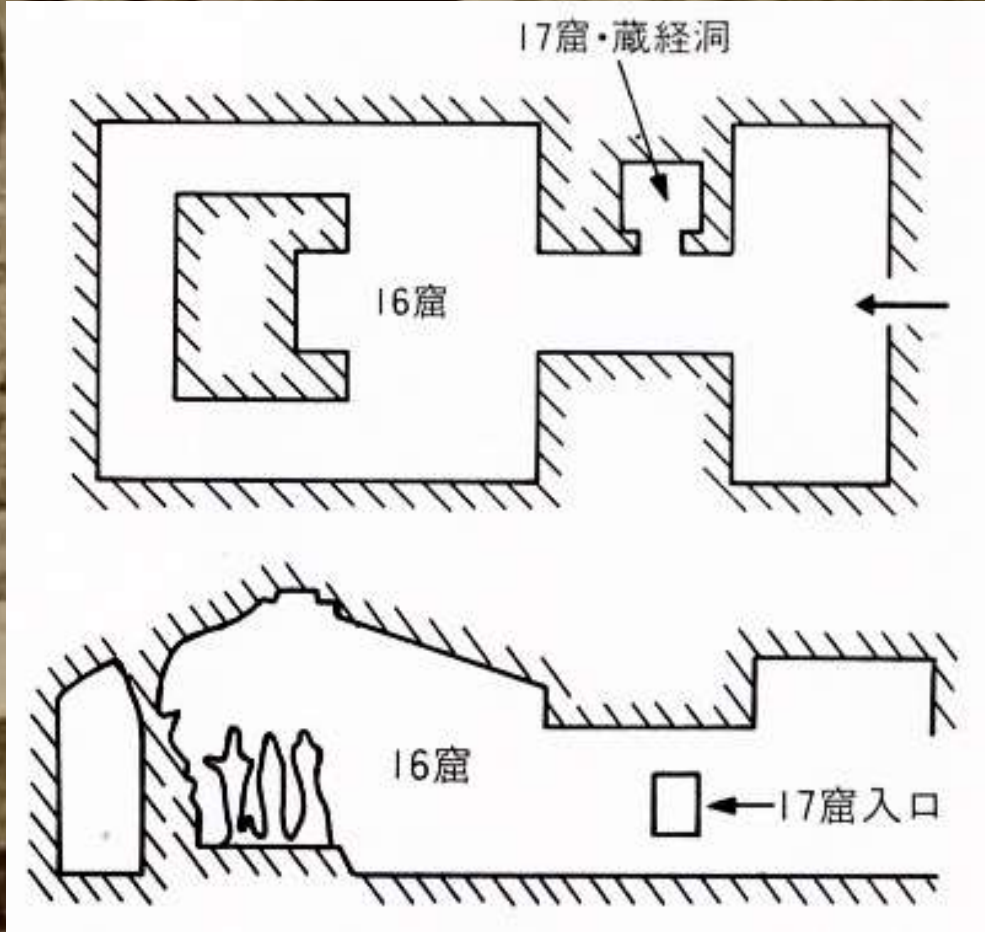
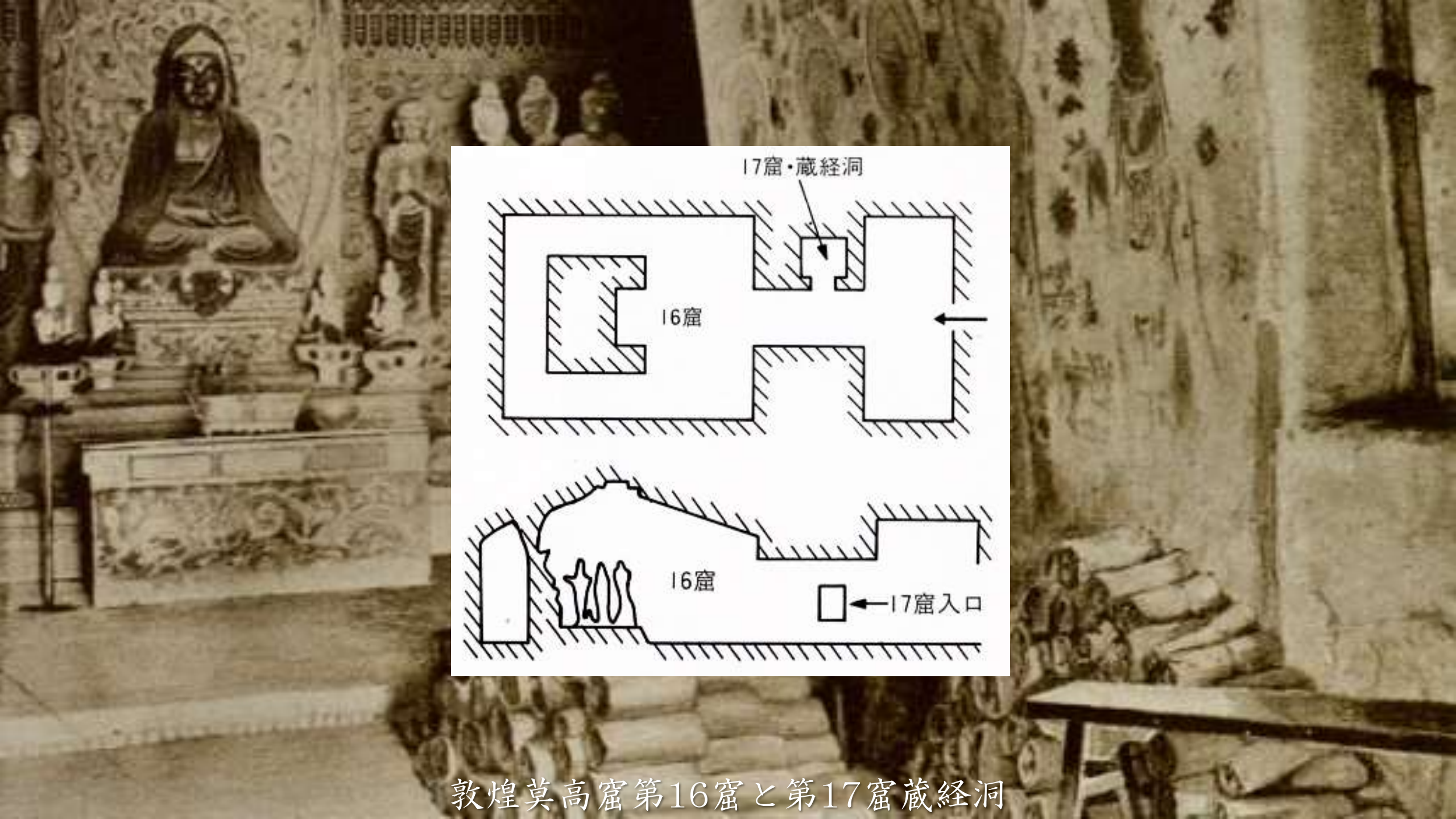
敦煌石窟で大量の古文書が発見される(1900年)

清朝





資料映像：NHKハイビジョン特集「敦煌莫高窟 美の全貌」より



敦煌莫高窟第16窟と第17窟藏經洞



敦煌莫高窟第16窟と第17窟藏経洞

敦煌写本『啓顔録』(S六一〇)

『啓顔録』はその後散逸し、一部の作品が『太平広記』などに転載されてはいるが、敦煌写本『啓顔録』に見られる狂言「附子」の類話は、伝わっていないかった。

では、その内容はどのようなもの

なのだろうか。  
密於房中私食之訖殘餽留鉢盂中密瓶送床脚下語弟子云好看我餽勿使欠少床底瓶中是極毒藥喫即斃人此僧即出弟子待僧去後即取瓶寫蜜搗餽食之唯殘兩箇僧來即索所留餽蜜見餽唯有一顆蜜又喫盡即大嗔云何意喫我餽蜜弟子云和尚去後聞此餽香實忍不得遂即取喫畏和尚來嗔即服瓶中毒藥望得即死不謂至今平安僧大嗔日作勿生即喫盡我汝許餽弟子即以手拈鉢盂中取兩箇殘餽向口連食報云只作如此喫盡此僧下床大叫弟子回即走去 有一僧年老痲疾恒共僧於仙堂中轉經即患氣短口干每須一盃熱酒若從堂外温酒恐堂中垢遲即於堂前懸一銅鈴私共弟子作号語好意聽吾鈴聲即依鈴語弟子不解鈴語乃問之僧曰云湯湯朗朗錯錯汝即可依鈴語湯朗朗錯錯子温酒我弟子聞鈴每即温酒數日已後弟子貪為戲劇遂忘温酒僧動鈴已後來見酒冷曰何意今日不聽鈴聲為与舊聲有別僧曰鈴聲但有別答云今日鈴聲云但冷打所以有別遂不温酒僧曰而故之

敦煌写本『啓顔録』(S610、723年写本)

有一僧忽憶鮠喫即於寺外作得數十箇鮠不買得一瓶  
密於房中私食之訖殘鮠留鉢盂中密瓶送床脚下語弟  
子云好看我鮠勿使欠少床底瓶中是極毒藥喫即斃  
人此僧即出弟子待僧去後即取瓶寫蜜搗鮠食之唯殘  
兩箇僧來即索所留鮠蜜見鮠唯有兩顆蜜又喫盡即  
大嗔云何意喫我鮠蜜弟子云和尚去後聞此鮠香實忍饑  
不得遂即取喫畏和尚來嗔即服瓶中毒藥望得即死  
不謂至今平安僧大嗔日作勿生即喫盡我汝許鮠弟子  
即以手作鉢盂中取兩箇殘鮠向口連食報云只作如此喫即  
盡此僧下床大叫弟子回即走去 有一僧年老痲疾恒共諸  
僧於仏堂中轉經即患氣短口干每須一盃熱酒若從堂向房  
過酒恐堂中垢遲即於堂前懸一銅鈴私共弟子作号語云汝  
好意聽吾鈴聲即依鈴語弟子不解鈴語乃問之僧日鈴  
云湯湯朗朗鐺鐺汝即可依鈴語湯湯朗鐺子過酒侍  
むかし一人の僧、ふと蒸しパンが  
食べたくなり、寺の外で数十個の蒸  
しパンと一瓶の蜜を買い、僧房の中  
でこっそり食べていた。食べ終わる  
と残った蒸しパンを鉢に入れ、蜜の  
瓶を寢床の下に置いて弟子に言った。  
「わしの蒸しパンがなくならないよ  
う、しっかりと見張っておれ。寢床の  
下の瓶の中は猛毒じゃ、飲めばすぐ  
に死んでしまふぞ」

有一僧忽憶餽喫即於寺外作得數十箇餽不買得一瓶  
密於房中私食之訖殘餽留鉢盂中蜜瓶送床脚下語弟  
子去好看我餽勿使欠少床底瓶中是極毒藥喫即斃  
人此僧即出弟子待僧去後即取瓶寫蜜搵餽食之唯殘  
兩箇僧來即索所留餽蜜見餽唯有兩顆蜜又喫盡即  
大嗔云何意喫我餽蜜弟子云和尚去後聞此餽香實忍饑  
不得遂即取喫畏和尚來嗔即服瓶中毒藥望得即死  
不謂至今平安僧大嗔日作勿生即喫盡我汝許餽弟子  
即以手作鉢盂中取兩箇殘餽向口連食報云只作如此喫即  
盡此僧下床大叫弟子回即走去 有一僧年老痲疾恒共諸  
僧於仏堂中轉經即患氣短口干每須一盃熱酒若從堂向房  
溫酒恐堂中垢遲即於堂前懸一銅鈴私共弟子作号語云汝  
好意聽吾鈴聲即依鈴語弟子不解鈴語乃問之僧日鈴  
云湯湯朗朗鐺鐺汝即可依鈴語湯湯朗鐺子溫酒待  
僧が去ると、弟子は瓶から蜜を出  
し、蒸しパンにつけて食べると、二  
個だけ残しておいた。僧が来て、  
取っておいた蒸しパンと蜜を出すよ  
うにいったが、蒸しパンは二個しか  
残っておらず、蜜もすっかり嘗め尽  
くされていた。

(僧は)怒って言った。

「どうしてわしの蒸しパンと蜜を食  
べたのじゃ」

有一僧忽憶鮓喫即於寺外作得數十箇鮓不買得一瓶  
密於房中私食之訖殘鮓留鉢盂中密瓶送床脚下語弟  
子去好看我鮓勿使欠少床底瓶中是極毒藥喫即斃  
人此僧即出弟子待僧去後即取瓶寫蜜搗鮓食之唯殘  
兩箇僧來即索所留鮓蜜見鮓唯有兩顆蜜又喫盡即  
大嗔云何意喫我鮓蜜弟子云和尚去後聞此鮓香實忍饑  
不得遂即取喫畏和尚來嗔即服瓶中毒藥望得即死  
不謂至今平安僧大嗔日作勿生即喫盡我汝許鮓弟子  
即以手於鉢盂中取兩箇殘鮓向口連食報云只作如此喫即  
盡此僧下床大叫弟子回即走去 有一僧年老痲疾恒共諸  
僧於仏堂中轉經即患氣短口干每須一盃熱酒若從堂向房  
溫酒恐堂中垢遲即於堂前懸一銅鈴私共弟子作号語云汝  
好意聽吾鈴聲即依鈴語弟子不解鈴語乃問之僧日鈴  
云湯湯朗朗鐺鐺汝即可依鈴語湯朗鐺子溫酒待

弟子は言った。

「和尚様が去った後、蒸しパンの良  
い香りがしたので、がまんできずに  
取って食べてしまいました。しかし  
和尚様に怒られるのが怖くて、瓶の  
中の毒薬を飲んで死のうと思つたの  
ですが、不思議なことにはいまだに何  
ともありません。」

有一僧忽憶鮓喫即於寺外作得數十箇鮓不買得一瓶  
密於房中私食之訖殘鮓留鉢盂中密瓶送床脚下語弟  
子去好看我鮓勿使欠少床底瓶中是極毒藥喫即斃  
人此僧即出弟子待僧去後即取瓶寫蜜搗鮓食之唯殘  
兩箇僧來即索所留鮓蜜見鮓唯有兩顆蜜又喫盡即  
大嗔云何意喫我鮓蜜弟子云和尚去後聞此鮓香實忍饑  
不得遂即取喫畏和尚來嗔即服瓶中毒藥望得即死  
不謂至今平安僧大嗔日作勿生即喫盡我汝許鮓弟子  
即以手作鉢盂中取兩箇殘鮓向口連食報云只作如此喫即  
盡此僧下床大叫弟子回即走去 有一僧年老痲疾恒共諸  
僧於仏堂中轉經即患氣短口干每須一盃熱酒若從堂向房  
溫酒恐堂中垢遲即於堂前懸一銅鈴私共弟子作号語云汝  
好意聽吾鈴聲即依鈴語弟子不解鈴語乃問之僧日鈴  
云湯湯朗朗鐺鐺汝即可依鈴語湯朗鐺子溫酒侍

僧は怒って言った。

「どうすれば、あんなにたくさんの  
蒸しパンを平らげられるんじや」  
すると弟子は鉢の中に残しておい  
た二個の蒸しパンを手でつかみ、つ  
ぎつぎと頬張って言った。

「こうやっただんですよ。」

僧が寢床から降りて大声で怒鳴る  
と、弟子は逃げていってしまった。



敦煌写本『啓顔録』(S六一〇)

敦煌写本『啓顔録』は、卷末の奥書から唐の開元十一年(七二三年)に書き写されたものであることがわかった。

この古文書の発見により、鎌倉時代の『沙石集』よりも五百年以上も前に、中国に狂言「附子」のルーツがあったことが明らかになった。

密於房中私食之訖殘餽留鉢蜜盃中密瓶送床脚下語弟子云好看我餽勿使欠少床底瓶中是極毒藥喫即斃人此僧即出弟子待僧去後即取瓶寫蜜搵餽食之唯殘兩箇僧來即索所留餽蜜見餽唯兩顆蜜又喫盡即大嗔云何意喫我餽蜜弟子云和尚去後聞此餽香實忍不得遂即取喫畏和尚來嗔即服瓶中毒藥望得即死不謂至今平安僧大嗔日作勿生即喫盡我汝許餽弟子即以手拈鉢盃中取兩箇殘餽向口連食報云只作如此喫盡此僧下床大叫弟子回即走去 有一僧年老疾恒共僧於仙堂中轉經即患氣短口干每須一盃熱酒若從堂外温酒恐堂中垢遲即於堂前懸一銅鈴私共弟子作号語好意聽吾鈴聲即依鈴語弟子不解鈴語乃問之僧曰云湯湯朗朗錯錯汝即可依鈴語湯朗朗錯錯子温酒我弟子聞鈴每即温酒數日已後弟子貪為戲劇遂忘温酒僧動鈴已後來見酒冷曰何意今日不聽鈴聲為与舊聲有別僧曰鈴聲但冷、打、所以有別遂不温酒僧曰而赦之

敦煌写本『啓顔録』(S610、723年写本)

開元十一年十一月五日  
有別答云今日鈴聲云  
潤子於

## 中国の落語が伝える 「附子」

### 〔解説〕

この話は文献は散逸したものの、民間では脈々と語り継がれていた。その一つに単口相声（中国落語）の『学徒』がある。

主人公は家具屋の奉公人の「私」。日頃から主人のけちに不満を持っていた「私」は、主人の留守に鶏やハムなどのご馳走を平らげ、主人が毒だといった酒を飲んでしまう。

店に戻った主人にとがめられた「私」は、逆にとんちを働かせて主人をやりこめてしまう。





相声艺人·刘宝瑞 (1915~68)

朝鮮にも伝わった「附子」

〔解説〕

十五世紀ごろ、朝鮮半島でも狂言「附子」の類話が伝えられていた。

李氏朝鮮初期の文官・姜希孟

(강희맹、一四二四〜八三) が編んだ説話集『村談解頤』に、次のような話が見られる。

村談解頤 全

〔朝鮮〕姜希孟『村談解頤』

庭の柿が熟したので、僧はこれを摘むと籠の中に入れ、梁の上に置いて、喉が渇くたびにこれを啜っていた。小僧が「それは何か」とたずねると、僧は「これは毒の果物じゃ。子供が食えば、舌が爛れて死ぬぞ」と言った。

用事で外出することになり、小僧に僧房の見張りをさせた。すると小僧は竹竿で梁の上の籠を下ろし、食べたいだけ柿を食べると、茶臼で蜜の瓶を打ち割った。

村談解頤

全

〔朝鮮〕姜希孟 『村談解頤』

小僧は柿の木に登り、僧が帰るのを待った。僧が帰ると、部屋には蜜が満ち、柿の籠が落ちてゐる。僧は怒り、杖で柿の木を叩き、「早く降りて来い！」といった。

小僧は、「私が鈍かったために、誤って茶臼で蜜瓶を割ってしまいました。怖くなって死のうとしたのですが、首をくくるにも縄がなく、首を斬るにも刃物がありません。そこで籠に入った毒の果物をすべて食べたのですが、どうしても死ねず、木の上に登って死ぬのを待っていました」

僧はそれを聞くと、笑って赦した。

村談解頤 全

## なぜアジアの伝統芸能を

学ぶのか？

日本はアジアとの交流の中で独自の文化を築き上げてきた。このため、日本文化の特色を理解し、世界の人々に伝えるためには、まず何がアジアに共通のもので、何が日本独自のものなのかを正しく理解する必要がある。

この講義では、アジアの庶民文化に大きな影響を与えた中国の民間伝承（四大民間故事）と、それを伝えた伝統芸能（戯曲・曲芸）の世界を学ぶとともに、日本との類似点や相違点について考えていきたい。